

基礎看護技術の学内演習における学生の困難さと対処行動

—グループ学習を活用して—

平瀬節子・野村晴香・高橋永子・橋本和子

(高知大学医学部看護学科基礎看護学講座)

Difficulties of Learning Encountered by Nursing Practice Students and Their Coping Actions During Simulation Training as Part of a Basic Nursing Science

— Through Utilization of Group Learning —

Setsuko HIRASE, Haruka NOMURA, Eiko TAKAHASHI, and Kazuko HASHIMOTO

Department of Nursing, Kochi University

Kohasu, Oko, Nankoku City, Kochi (783-8505) Japan

Abstract: Simulation training for nursing skills is performed at our school as part of a the course of basic nursing science, in order to give students first practical training based on knowledge they have acquired from nursing lectures, and lead to a better understanding of such training by restructuring their knowledge.

The most important purpose of such training is to foster students' ability to comprehend and to take action during simulated nursing practice, improving their proficiency levels.

At our school, the method of training consists of a combination of demonstrations by teachers and group learning, which lets students instruct each other under a leader elected from among them.

The present study was performed to determine the difficulties of learning encountered by nursing practice students during simulation training and their ways of coping with such difficulties.

Four categories were extracted as the difficulties that leaders of the students encountered, and three categories were extracted as the coping actions for each difficulty. Likewise, four categories were extracted as the difficulties that members of the students encountered, and four categories were extracted as the coping actions for each difficulty.

In the initial stage of training for life support of nursing skills, the leaders and the members all experienced those difficulties, but, they started to take the coping actions by degrees, thereafter they learned how to act and solve the problems they encountered. It means that they learned how to deal with the experiments and also understand their roles in their study in order to play their roles.

Here we report these results including some suggestions that were obtained throughout this research

キーワード：基礎看護技術，学内演習，グループ学習，対処行動

Keywords: basic nursing science, simulation training for nursing skills, group learning, coping actions

緒 言

看護基礎教育における看護技術教育は、カリキュラム改正による実習時間の減少や、在院日数の短縮に伴う患者の重症化、医療における安全確保、患者の権利擁護から、臨地実習で学生が経験できる看護技術に限られる傾向がある¹⁾。最近の新卒看護職員の早期離職等実態調査(2004年)では²⁾、現在やめたいと思っている看護師の約71%が「基本的看護技術が身につけていない」という悩みを抱えていると報告されており、看護基礎教育の中でどのように技術教育を行ってゆくの、その教育内容や到達目標が改めて問われる現実がある。

臨地実習で患者に対して基礎的な看護技術の実施が困難な状況のなかで、学内での看護技術演習を充実させることは看護技術を習熟させる上で重要である。それには、学生が既習の学習をもとに看護に必要な知識を実践にいかにつなげるかということが問われている。看護技術に関する研究では、看護技術習得に関する教授法の検討や学生の技術取得状況、自己教育力に関する研究などがなされており、指導上の学生の課題の明確化や演習によるリアリティの欠如、教授方法の工夫の必要性や自己学習の時間の確保など、自主的に学べる学習環境の整備に課題があり、今後は学生の学習活動に関する研究の発展が必要とされている³⁾⁻⁸⁾。

基礎看護学で行う基礎看護技術の学内演習は、学生が既習の学習を再構築し看護を実践するという、机上の学習から実践という学びを初めて体験する学習の場と言える。そこでは、学生のわかる力と習熟する力を育て、行動化していくことが重要となる。

本学では、教員のデモンストレーションと学生のリーダーを中心にグループ内で学生同士が指導しあうという、グループ学習を組み合わせた教授方法を行っている。本研究は、現在の教授方法が学生にどのような学びの体験となっているかを明らかにし、得られた結果を今後の教授方法に活かそうとするものである。その結果いくつかの示唆が得られたので報告する。

I. 研究目的

学内演習のグループ学習から学生が体験する困難さと対処行動を明らかにし、効果的な教育方法を検討する。

II. 研究方法

1. 対象

看護学科2年生の学生で同意を得られた60名、年齢19～23歳。

2. 調査期間：2006年5月25日～7月20日

3. 分析方法

生活援助技術の技術チェック合格後に「グループ内でのリーダーまたはメンバーを体験して考えたことの感想」を記入してもらった。その記載された内容から、学生が体験している困難さと対処行動とされる特性のある文章を抽出し内容分析の手法を用いて分析し、コード化していった。分析の信頼性、妥当性を高めるために繰り返し分析し、内容の意味を表現できているか検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

対象となる学生に対して次のことを文書にて説明し、研究の参加に同意が得られた学生のみ、同意書に署名してもらった。

- 1) 研究の趣旨・目的
- 2) 研究に対する参加は自由意思に基づき、研究への参加の有無が今後の学習に影響を及ぼさないことの保障。
- 3) 個人が特定できないよう、データの取り扱いを行う。
- 4) 研究結果は、関連学会や雑誌への投稿、学内での発表などを行う。

5. 用語の定義

困難さ：学生が学習するときに、難しい・わからないなどのように戸惑いを感じること。

対処行動：学生が学習をしていく過程のなかで、困難さを感じたときに、困難さを解決するために取る行動。

Ⅲ. 生活援助技術論演習の概要

1. 生活援助技術論の位置づけ

看護学を学んでいく過程で、1年次は哲学や心理学、生命倫理学などの共通科目と、栄養と代謝、身体のおしくみなど看護の基礎となる知識を学ぶ。そして、2年次では、1年次で学習したことを基盤として、基礎看護学のほかに、生活習慣と健康障害や子どもの成長と健康障害など各領域での看護の対象者の理解や、精神看護援助論などより専門的で具体的な看護援助について学んでいる。基礎看護学における生活援助技術論は、専門分野の導入に位置づけられている。教授内容の組み立てとしては、生活援助技術論についての概念を講義で学び、それに関連した看護技術について演習を通して習得している。

2. 生活援助技術論演習方法

- 1) 看護学科2年生61名を1グループ3～4名で構成し、20グループに分けた。
- 2) 演習ごとにリーダーを各グループで話し合いにより1名選出した。
- 3) リーダーが教員からデモンストレーションを受け、グループメンバーに原理原則に基づいた技術を伝達した。
- 4) デモンストレーション実施から1週間後の演習の時間1時限目にグループに対して教員による技術の確認を行い、2時限目には、原理原則に基づいた技術を習得できているか、学生個人に対して教員が技術チェックを行った。
- 5) 技術チェックに合格すると、各項目の演習についてのレポートを提出することとした。
演習の項目は「移動・体位変換」「無菌操作」「洗髪」「全身清拭」「便尿器の使用・陰部洗浄」の5項目であった。

第1表 生活援助技術論 講義内容

講義内容		
4月13日	生活援助技術論概論	
4月14日	看護技術の基本	(観察・コミュニケーション)
4月20日	看護技術の基本	(体位と移動・ボディメカニクス)
4月20日	看護技術の基本	(安全：無菌操作・感染予防)

第2表 生活援助技術論 演習内容

演習項目	技術項目
移動	側臥位 腹臥位 水平移動 上方移動 半座位 座位 端座位 車椅子への移乗 良肢位
無菌操作	滅菌物の取り出し方 ガウンテクニック 滅菌手袋の装着
洗髪	ケリーパットを用いたベッド上での洗髪
全身清拭	石鹸を用いた全身清拭
便尿器の使用・陰部洗浄	尿器の挿入 便器の挿入 陰部洗浄

第3表 演習スケジュール

月日	演習内容	方法	学生の参加状況
5月10日	移動	デモンストレーション	リーダーのみ参加
5月17日	無菌操作	デモンストレーション	リーダーのみ参加
5月24日	洗髪	デモンストレーション	リーダーのみ参加
5月25日	移動	技術の確認	全員参加
5月30日	清拭	デモンストレーション	リーダーのみ参加
6月1日	無菌操作	技術の確認	全員参加
6月7日	便尿器の使用・陰部洗浄	デモンストレーション	リーダーのみ参加
6月8日	洗髪	技術の確認	全員参加
6月15日	清拭	技術の確認	全員参加
6月22日	便尿器の使用・陰部洗浄	技術の確認	全員参加

IV. 結果

1. リーダーの困難さ (第4表)

リーダーの困難さには【デモンストレーションの理解が難しい】【教えることが難しい】【責任からくる負担】【時間調整が困難】の4つの大カテゴリーが抽出された。

- 1) 【デモンストレーションの理解が難しい】は〈リーダーによって理解が違う〉〈デモンストレーションの理解が困難〉からなっていた。「伝達のときに様々な意見が出てわからなくなった」や「覚えることが多く理解が難しい」など、デモンストレーションを受けた人によって理解した内容が違ったり、デモンストレーションの内容の理解について困難さを感じていた。
- 2) 【教えることが難しい】は〈伝えることは難しい〉〈自分が理解できないと人には伝えられない〉からなっていた。「実際にメンバーに伝えるときにわからなくなる」や「自分が理解できないと質問には答えることができない」などリーダーは、自分自身の理解度が、メンバーに伝える際に不足していることを実感し、伝えることへの困難さを感じていた。
- 3) 【責任からくる負担】は〈伝えることに責任を感じる〉〈伝達の準備が大変〉からなっていた。「正確に伝えることへの責任」や「資料作りが大変」など、メンバーに伝える際に正確に伝えなければならないというプレッシャーと伝えるための資料作りなど、リーダーとしての責任からくる困難さを感じていた。

- 4) 【時間調整が困難】は〈メンバーの都合が合わない〉〈練習が十分できない〉からなり、「メンバーの都合が合わず伝達が遅れた」や「練習が十分できなかった」など、メンバーの協力不足による困難さを感じていた。

第4表 リーダーの困難さ

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	総数
デモンストレーションの理解が難しい	リーダーによって理解が違う	伝達のときに様々な意見が出てわからなくなった	2
		グループごとに伝える内容が違っていった	2
	デモンストレーションの理解が困難	覚えることが多く理解が難しい	4
		一人で何とかできるものではない 実際に伝えた内容が間違っていた	1 1
教えることが難しい	伝えることは難しい	実際にメンバーに伝えるときにわからなくなる	4
		自分でできると思ってもわからなかった	3
		人に教えるということは難しい	10
		自分が得たことを完全に伝えることは難しい	8
責任からくる負担	自分が理解できないと人に伝えられない	自分が理解できないと伝えられない	6
		自分に知識がないと質問に答えることができない	1
	わからないところがあるままメンバーに伝えない	3	
責任からくる負担	伝えることに責任を感じる	メンバーに迷惑をかけた 正確に伝えることへの責任	3 9
	伝達の準備が大変	資料作りが大変	6
時間調整が困難	メンバーの都合が合わない	メンバーの都合が合わず伝達が遅れた 班で時間が合わず個人で練習した	4 1
	練習が十分できない	練習が十分できなかった	3

2. リーダーの対処行動（第5表）

リーダーの対処行動には【準備をしてデモンストレーションに臨む】【理解を補う】【伝達の工夫】の3つの大カテゴリーが抽出された。

- 1) 【準備をしてデモンストレーションに臨む】は〈デモンストレーションに対する集中力の高まり〉〈デモンストレーションに対して準備をする〉からなり「神経を集中させてデモに参加する」「自分が資料を確認しておくべき」など、デモンストレーションに対する心の準備の高まりや、デモンストレーションに臨む対処行動が変化していた。
- 2) 【理解を補う】は〈意見交換をする〉〈根拠を調べる〉からなり「意見交換をすることでよりよい方法が得られる」や「自分で調べて理解を深めた」など理解の難しい部分に対して、意見交換や自己学習などの対処をとっていた。
- 3) 【伝達の工夫】は〈正確に伝える技術を身につける〉〈資料を作成する〉〈モデルを使う〉からなり、「どこが重要か考える」「伝える技術を身につける」「メンバーがわかるようにモデルを使った」など、伝えるためにはどのような能力が必要か判断し、内容の理解を深め、伝える工夫を行動化していた。

第5表 リーダーの対処行動

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	総数
準備をしてデモンストレーションに臨む	デモンストレーションに対する集中力の高まり	神経を集中させてデモに参加する	4
		後で思い出せるようにしっかりメモをした	2
理解を補う	意見交換をする	自分が資料を確認しておくべき	2
		他のグループと一緒に練習する	4
伝達の工夫	正確に伝える技術を身につける	リーダー同士で意見交換を行う	8
		意見交換することでよりよい方法が得られる	6
伝達の工夫	根拠を調べる	自分で調べて理解を深めた	2
		リーダーには国語の力も必要	1
		情報を正確に伝える技術を身につける	3
		どこが重要か考える	3
		わかりやすい資料を作る	3
資料を作成する	モデルを使う	他のリーダーと伝える内容を確認する	3
		デモの内容を資料にしメンバーに配る	4
		1回目より2回目の資料を改善させた	1
モデルを使う	メンバーがわかるように人形で伝達した	1	

3. メンバーの困難さ (第6表)

メンバーの困難さには【リーダーになることへの不安】【リーダーの伝達が信用できない】【リーダー以外に学ぶ手段がない】【時間の調整が困難】の4つの大カテゴリーが抽出された。

- 1) 【リーダーになることへの不安】は〈リーダーができるか不安〉〈リーダーの役割がわからない〉〈メンバーに教えるのが大変〉〈リーダーはデモを受けるのが大変〉からなっていた。「最初なのでリーダーが何をしたらいいのかわからない」「教えることが多くて大変」など、リーダーの役割が明確ではなく、メンバーもリーダーが何をするのか不安を感じていた。
- 2) 【リーダーの伝達が信用できない】は〈リーダーのやっていることが正しいか不明〉〈リーダーよりの受け止め方の違いによる戸惑い〉からなっていた。「メンバーに伝わらないこともあるような気がした」「他のグループと違うと不安になった」など、リーダーの伝達に不安や疑問を持っていた。
- 3) 【リーダー以外に学ぶ手段がない】は〈リーダーしか頼る人がいない〉〈リーダーからの伝達不足〉〈リーダーからの資料がないと困る〉からなっていた。「リーダーが教えてくれなかった」「資料がなく困った」など、リーダーからの伝達で学ぼうとしており、リーダーへの依存が強くみられた。
- 4) 【時間の調整が困難】は〈時間の調整がつかず集まれない〉〈練習に時間がかかる〉からなり、「メンバーで集まるのが難しかった」「時間がかかり練習できなかった」など、集団での伝達・練習をするために、個人で時間をコントロールすることの困難さが見られた。

第6表 メンバーの困難さ

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	総数
リーダーになることへの不安	リーダーができるか不安	自分がこのようにできるか不安	4
	リーダーの役割がわからない	最初なのでリーダーが何をしたらいいのかわからない	2
	メンバーに教えるのが大変	理解できていないと教えることは難しい 教えることが多くて大変 伝えることが大変 何度も説明しないといけないので大変	2
			3
			7
リーダーはデモを受けるのが大変	デモが聞き取れなくて大変 デモに出るのはリーダーだけなので責任がある デモをまとめるのが大変	1 2	
リーダーの伝達が信用できない	リーダーのやっていることが正しいか不明	デモをみていないのでわかりにくかった メンバーに伝わらないこともあるような気がした リーダーに習うも疑問がわいた	2 1 1
	リーダーよっての受け止め方の違いによる戸惑い	班によって内容が違う 他のグループと違うと不安になった	7 1
リーダー以外に学ぶ手段がない	リーダーしか頼る人がいない	リーダーの情報がすべて リーダーに頼っていた リーダーは代表者として理解し伝えなければならない	3 3 1
	リーダーからの伝達不足	リーダーが教えてくれなかった メンバーはデモを見ていないので細かいところがわからない	3 4
	リーダーからの資料がないと困る	資料がなく困った 資料作りはリーダーの重要なことである	3 1
時間の調整が困難	時間の調整がつかず集まらない	みんなと時間が合わなかったので他のグループとした メンバーで集まるのが難しかった 時間を確保できなかった グループで協力して時間を作るべきだった	3 8 2 2
	練習に時間がかかる	時間がかかり練習できなかった 患者役をするので時間がない 清拭は時間がかかるので大変だった	1 2 1

4. メンバーの対処行動（第7表）

メンバーの対処行動には【リーダーの方法を取り入れる】【学習方法を工夫する】【練習を重ねる】【時間の調整を行う】の4つの大カテゴリーが抽出された。

1) 【リーダーの方法を取り入れる】は〈リーダーの失敗を次に生かす〉〈リーダーの資料を参考に〉〈リーダーから学ぶ〉からなり、「リーダーのアドバイスを見習いたい」「他のグループと協力して教えてくれた」など、リーダーの伝達の方法を見て、メンバーも自分たちの行動を振り返り考えることができていた。

2) 【学習方法を工夫する】は〈準備性を高める〉〈疑問を持って臨む〉〈意見を交換して学びを

深める) からなり、「なぜこうなるのか考えた」「メンバーの意見を聞いて改善した」など、グループ内で根拠を基にして看護技術を考え、自主的に学ぼうとする様子がうかがえた。また、討論することで他の方法の良いところや、自分の改善点などに気づくことができていた。

- 3) 【練習を重ねる】は〈試行錯誤を繰り返す〉〈実際に練習をする〉からなり、「いろいろなやり方を見て原理原則を考える」「体験することに価値がある」など、根拠を考えるだけでなく、実際に看護技術を行ってみることで、自分たちの方法が適当なのか考えることができていた。
- 4) 【時間の調整を行う】は〈時間を有効に使う〉からなり、「朝早く来て練習した」「時間がないので1回の練習に集中した」など練習時間を作ることや、短い時間で最大の学習ができるように考えることができた。

第7表 メンバーの対処行動

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	総数	
リーダーの方法を取り入れる	リーダーの失敗を次に生かす	自分がリーダーになったらメモを配る	1	
		自分がリーダーになったらイラストをつける	1	
		勉強して不明な点がないようにする	2	
		リーダーは一度練習をして確認することが必要	1	
		前回リーダーだったので協力できた	1	
	リーダーの資料を参考にする	リーダーが分かりやすい資料を作ってくれた	9	
		リーダーの資料でイメージがついた	2	
		リーダーから学ぶ	リーダーのアドバイスを見習いたい	2
			自分はここまでしなかったので反省する	1
			リーダーが練習に付き合ってくれた	5
リーダーが分かりやすく教えてくれた	11			
リーダーが情報を集めてくれた	1			
学習方法を工夫する	準備性を高める	予習が必要	6	
		自主的な練習が必要	1	
		事前に資料を見る	2	
		自分が調べた知識を共有する	2	
	疑問を持って臨む	なぜこうなるのか考えた	2	
		異なっていることに対して根拠を持って話し合う	1	
		根拠をもとに理解する	1	
	意見を交換して学びを深める	メンバーの意見を聞いて改善した	13	
		疑問をグループで共有した	2	
		他の班と合同で伝達した	1	
話し合っている		5		

練習を重ねる	試行錯誤を繰り返す	試行錯誤して方法を考えた	4
		プリントを見て復習した	1
		不安なところを調べたり聞いたりした	1
		いろいろなやり方を見て原理原則を考える	2
	実際に練習をする	練習していくと理解しできるようになった	1
		何回もすると慣れた	1
		簡単そうであるが実践すると難しい	1
		体験することに価値がある	3
	練習が大切	3	
時間の調整を行う	時間を有効に使う	朝早く来て練習した	2
		時間がないので1回の練習に集中できた	1
		リーダーを中心に要領よく短時間にできた	1

V. 考 察

1. 困難さ

リーダーの困難さには、【デモンストレーションの理解が難しい】【教えることが難しい】【責任からくる負担】【時間調整が困難】の4つの大カテゴリーが抽出され、その意味合いとしては、教授内容の理解の困難さや、役割を果たすことに強く責任を感じることから生じる負担感、技術の伝達や練習時間の確保が困難な状況であるという学生の状況が考えられる。

【デモンストレーションの理解が難しい】【教えることが難しい】は、リーダーがデモンストレーションでの教授内容を理解する困難さが基盤にあり、メンバーに伝えるという行為を通じて改めて「理解することはどのようなことなのか」を実感することから起こる困難さである。1年次から机上の学習体験を積み重ねている学生は、技術演習を通して、暗記ではなく行動の意味を根拠をもって理解した上でメンバーに説明できなければ、メンバーに伝わらないことを学び、それが困難さとして表現されたと考えられる。デモンストレーションで学ぶ内容は、教員が実際に説明を行いながら、実技によって教授する方法であるため、学生は実技を見ながら、メモを取り内容を把握しなければならない。動作や手技が細かいところについても、理解するのに苦労している。さらに、リーダーの責任として、「正確に伝える」ことが重要であると認識されているため、リーダーの役割を果たすうえで負担感が強いことが推察される。教員はこの困難さに対し、デモンストレーションの際に、混乱したり、間違いやすい箇所について、強調するなど工夫している。また、デモンストレーション終了後のグループでの練習の様子を観察し、誤解が生じているところや、混乱しているところに対しては、全体の学生に対して演習の際に、再度部分的なデモンストレーションを実施し理解を助けている。

【責任からくる負担】は、リーダーとしての役割を認識し、遂行する際に感じる困難さと考えられる。現在行っている教授方法は、リーダーのみがデモンストレーションを受けるため、「リーダーにしかわからない」という状況が生じている。メンバーから抽出された結果からもわかるように、「リーダーを頼りにする」という状況が強いほど負担感は増大するものと思われる。

一方、メンバーの困難さには、【リーダーになることへの不安】【リーダーの伝達が信用できない】【リーダー以外に学ぶ手段がない】【時間の調整が困難】の4つの大カテゴリーが抽出され、その意味合いとして、リーダーに強く依存し、受け身で学習するために、リーダーに対しての不満や学習行動の不安が見られた。

【リーダーになることへの不安】は、リーダーがデモンストレーションでの教授内容をメンバーに教えている様子を見て、教授内容を理解した上でわかりやすく教えないといけないため、メンバーはリーダーのすることに対して不安を持つ。また、メンバーに正確に教えないといけないというプレッシャーを、リーダーを通して感じているように思われる。

【リーダーの伝達が信用できない】【リーダー以外に学ぶ手段がない】は、学習方法がリーダーに強く依存し受け身であるため、リーダーの伝達に少しでも不明な点があると、メンバーは混乱し不信につながっている。そのことが、さらにリーダーの責任を重くし、負担が強くなっていると考えられる。

【時間の調整が困難】は、リーダー、メンバーともに共通した困難さであった。リーダーに於いての時間調整の困難さは、受けたデモンストレーションの内容の整理や、不明な部分について他のグループリーダーとの意見交換、あるいは、伝達のための技術の練習時間の捻出や、伝達のために必要とされるグループメンバーとの時間調整などを示している。今までの学生の学習状況は、通常、個人で学習することが主体であり、さらに2年次になると学生のカリキュラムが過密になる上に、部活動も活発に行われている現状がある。今まで個人のペースで学習していた行動を、それぞれが、目標に向かって、自分自身のスケジュールを学生同士の関係性のなかで調整するという行動の変容が求められる。そのためには、学生に時間の調整能力と、コミュニケーション能力が求められる。

ラザルス⁹⁾は、「ストレスとは、ある個人の資源に、何か重荷を負わせるような、あるいは、それを超えるようなものとして評価された要求である」と定義し、その評価には一次評価と二次評価があるとされている。そして、目標が認識されていなければ、重荷は認識されないと解釈している。学生が困難さを認識するということは、ラザルスの考え方をもとにすると、リーダー、メンバーそれぞれが自分の役割において目標を認識しているからこそ起こってくる困難さとも言える。リーダーは「デモンストレーションの内容を正しくメンバーに伝える」という目標と「伝達の結果、メンバーが技術を理解できたと感じる」という目標の達成が脅かされるという状況であると考えられ、メンバーは「リーダーの伝達を理解して、技術チェックに合格できる技術を身につける」という目標達成が脅かされるという状況であると考えられる。これらのことから、リーダーはメンバーに比べ目標が複雑な分、困難さが強く認識されていると考えられる。しかし、達成する目標が認識されているということは、自分たちの進むべき方向性を理解し対処行動につながる可能性を示しており、教育する側は、学生の示す困難さを単なる不満と解釈せず、学生なりの目標の認識の現れであると理解し、学生を支援することが重要であろう。

2. 対処行動

リーダーの対処行動として、【準備をしてデモンストレーションに臨む】【理解を補う】【伝達の工夫】が抽出され、教授内容の理解の困難さや、リーダーとして役割を果たすための対処行動が取られていた。一方、時間の調整に対しては対処行動が抽出されなかった。

【準備をしてデモンストレーションに臨む】【理解を補う】はリーダーがデモンストレーションに参加し、教授内容を理解することに対する対処行動である。初めてデモンストレーションを受けたリーダーの経験から、リーダー自身も次につながる対処を考え、また、メンバーは、「リーダーの失敗を次に生かす」などの行動が見られていた。また、デモンストレーションの回数が進むにつれて、「リーダーの工夫を学ぶ」というような、メンバーのときに体験したリーダーの行動を参考にしながら、対処行動がとられており、対処行動に発展が認められる。また、技術伝達の準備段階で、他のリーダーと意見交換や文献の確認など伝達する技術の根拠について理解を深めるという対処行動が認められたことは、学習の深まりにつながる行動であると考えられる。

【伝達の工夫】は、リーダーがメンバーに伝える際に、相手に伝わるよう工夫している対処行動で、伝達する内容の洗練化に加え自分自身のコミュニケーションの技術を向上させている。さらに、伝達の道具として、資料やモデル人形を使うというように、伝達方法のバリエーションが広がっている。これは、ただ単に生活援助技術の手技を学ぶだけでなく、リーダーという役割を通して、教授内容を深く理解し、コミュニケーション能力や、問題解決能力を発展させていることがうかがえる。

一方、メンバーの対処行動には、【リーダーの方法を取り入れる】【学習方法を工夫する】【練習を重ねる】【時間の調整を行う】の4つの大カテゴリーが抽出され、より効果的な学習をするためには主体的に学習に取り組まなければならないことに気づき、そのためにはどうしていくべきか問題解決的な対処行動がとられていた。

【リーダーの方法を取り入れる】は、メンバーが一番多くとった対処法である。メンバーという立場で「このようにすると理解しやすい」というようにリーダーのとった伝達方法の不足部分を実感することにより、メンバーがリーダーになったときには、伝達方法を工夫するという対処方法に発展している。さらに、リーダーの工夫した伝達方法を見て、メンバーは効果的な伝達方法を取り入れて学習することができているようである。ここでは、単にリーダーの行動を批判的に見るのではなく、お互いの立場を経験することにより、リーダーの困難さに理解を示しつつ、効果的なリーダーの伝達方法を受け手として実感することで、次の対処方法につなげるという行動の成長につながっているように思える。

【学習方法を工夫する】【練習を重ねる】では、グループ学習をすることで、他のメンバーの多様な視点や考え方に気づき、他のメンバーからの意見や考え方を取り入れ、疑問を解決することで、より深い理解が可能となっている。ここには、コミュニケーション能力の成長が見てとれる。リーダーだけでなくメンバー自身も事前に学習するという行動が取れている。これは、メンバーの役割の自覚ができてきたことを意味し、リーダーから抽出されている【責任からくる負担】の軽減につながる行動だといえる。このことで伝達がよりスムーズになり、技術に対する知識を教え合うことで、知識の共有ができ理解が深まっている。さらに、練習を重ねるという行動は、看護技術の習得が、机上の学習のみでは難しいことを実際に体験の中から得、学生自らが、不足部分に気づき主体的に学ぶという行動、すなわち、技術の理解には行動が伴うということを経験から学び取っているといえる。

【時間の調整を行う】は、メンバーから抽出された対処行動である。メンバーは時間を合わせることの大切さと、限られた時間で効率よく学習できるように練習の工夫を行うことで、メンバーとしての役割行動がとれるように努力していることがうかがえた。

3. グループの育成

本研究の結果より、リーダー、メンバーから抽出された困難さに対して、抽出された対処行動は、効果的で問題解決的な対処行動が取られていると考えられる。看護技術を習得する際に学生自身が「出来る」という自信を持つことは、学習効果に大きな影響を及ぼす。バンデューラは自己効力感を高める要素として「制御体験」「代理経験」「社会的説得」「生理的感情的状態」をあげ、特に成功体験である「制御体験」が個人の行動に対する自信に信念を与えると述べている¹⁰⁾。今回の研究では、メンバーの対処行動の中に「リーダーの方法を取り入れる」が抽出された。これはバンデューラのいう「代理体験」に相当すると考えられる。メンバーにとって、リーダーが工夫しながら伝達する行動を通して、「自分も、リーダーになったときはこのように行えばいいんだな」など、デモンストレーションに対する準備性を高め、できる自信を高めることにつながる。また、リーダーに

としては、自分の工夫がメンバーに取り入れられることで、自分の行動が認められた体験となり、成功体験へつながってゆくのではないかと考えられる。また教員が、リーダーや、メンバーの努力や工夫を認め肯定的なフィードバックを行うことが重要であり、「準備性を高める」「学習方法を工夫する」などの行動で、学生が自ら考えて行動するという学びは、判断する力を培い自律性を育てる基盤となるのではないかと考えられる。

リーダーの困難さとして【責任からくる負担】が抽出されている。また、メンバーからは、【リーダーの伝達が信用できない】や【リーダー以外に学ぶ手段がない】など、リーダーに対して示された強い依存性は、メンバーとしての役割の認識不足がうかがわれ、そのことがさらに、リーダーの負担の増長につながると考えられる。しかし、メンバーの対処行動の中から、【リーダーの方法を取り入れる】【学習方法を工夫する】【練習を重ねる】などが抽出されている。メンバーはお互いの役割を経験することでリーダーの困難さを理解し、メンバーも徐々に役割行動がとれるようになり、最初の段階で示されたリーダーに対する強い依存性が、問題解決的な対処行動が取れるようになるというように行動に変化がみられている。このことから学習の深まりと、お互いの協力関係が築かれていったことがうかがえる。

生活技術演習の最初の段階は、リーダーもメンバーも強い困難さを体験するが、徐々に対処行動を身につけ、問題解決への行動が可能となっている。そこには、体験として「理解する」ということを実感として学び、また、メンバーも自分の役割を徐々に理解し、「メンバーの役割を取ることができる」という学びの深まりがうかがえる。教員は、学生が感じる困難さの意味を理解し、初めの段階で行われる演習をグループ全員が乗り越えられるよう学習環境を整えるというような支援が求められる。それには、デモンストレーションを行う際、学生が迷う部分はどこであるかを把握し、学生の理解を助ける的確な技術演習を実施するという教員の教育技術の向上と、グループで学び取ってほしい部分を明確にイメージし、グループを育てる熱心な関わりが要求される。それとともに教員は、学生自らが困難を乗り越えられると信じ「待つ」という姿勢も必要であろう。

VI. 結 論

リーダーは、教員から教わった技術を、モデルとなってメンバーに教えようとする。しかし、初めて教わる技術を教えるためメンバーへの伝達が不十分であり、不安も大きい。しかも、メンバーからは依存され、さらに責任の重さが加わる。一方、メンバーは、グループ学習が始まった当初「自分たちの学習に対する不安を取り除き、技術が習得できるという欲求を満たしてほしい」というリーダーに対する依存願望が現れている。しかしリーダーは、メンバーが抱く依存願望に対して十分に応えることができないため、メンバーの依存や戸惑いがリーダーに対する不信に変わっている。このような状況のなか、グループでの技術の習得が困難であると、リーダーは教授方法を考えて自分たちに合う方法に変化させている。またリーダーは、一人のメンバーでもあり、メンバーとしての体験を活かし、どのような教え方が良いのかを考え、それを実行する姿勢が認められた。一方、メンバーは、リーダーに全てを任せるのではなく、リーダーをサポートし、グループ内で影響しあい、よりよい学習方法を考える積極的な態度が認められた。

今回の研究では、基礎看護技術のグループ演習において、学習の困難さを体験する一方で、グループ内で困難さを乗り越えようとする対処行動が次第に芽生えてくるといった結果が得られた。教授方法として、リーダーシップが発揮できるように、何を学習するのか目標設定を明確に提示し、リーダーのみならず、メンバーも自発的に参加できるように全員に対する動機づけが必要であろう。

おわりに

本研究は、自由記載の感想からデータを抽出し分析を行ったため、どの程度の学生が困難さを感じ、対処できていたかという量的な現状の把握には至っていないところに研究の限界がある。今後は、演習後の授業評価を行う際に、研究結果をもとに現状の把握を行い、より効果的な演習方法の構築が課題となる。

引用・参考文献

- 1) 看護基礎教育における看護技術のあり方に関する検討会：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2003.
- 2) 社団法人 日本看護協会：2004年 新卒看護職員の早期離職等実態調査 報告書，日本看護協会，P47-48，2004.
- 3) 内正子・津田紀子・高谷嘉枝：基礎看護技術演習前後における学生のエゴグラムの変化—学生が主体となる教授方法を通しての考察—，神戸大医学部保健学科紀要，第14巻，109-116，1998.
- 4) 岩本真紀・近藤美月・立石有紀他：ビデオのフィードバック機能を利用した看護技術習得における学習効果（その2）—学生に指導係を担当させたグループ学習を組み合わせ—，香川医科大学看護学雑誌，第6巻第1号，47-54，2002.
- 5) 菊池昭江：看護学部1年生の学習意欲と学習時間および学習理解度との関連，東京女子医科大学看護学部紀要 Vol. 2，1999.
- 6) 穴沢小百合・松山友子：わが国の看護基礎教育過程における基礎看護技術演習に関する研究の動向—1991～2002年に発表された文献の分析，国立看護大学校研究紀要，第3巻第1号，54-64，2004.
- 7) 吉野由美子：擬似患者体験を取り入れた学習に関する教師の教育観の検討—排泄に関連する単元において擬似患者体験を取り入れたことのある教師の教育観の比較検討から—，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報，第12巻，1-7，2002.
- 8) 森田敏子・南家喜美代・有松操他：達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究—模擬患者を導入した吸引の看護技術試験；模擬患者の認識から—，日本看護学会論文集（看護教育）第36回，311-313，2005.
- 9) R・S・ラザルス，林峻一郎訳：ストレスとコーピング，初版第3刷，p.22-26，星和書店，東京都，1995.
- 10) アルバート・バンデューラ，本明寛，野口京子監訳：激動社会の中の自己効力，第1刷，金子書房，東京都，P3-5，1997.

平成18年（2006）11月30日受理

平成19年（2007）1月11日採択